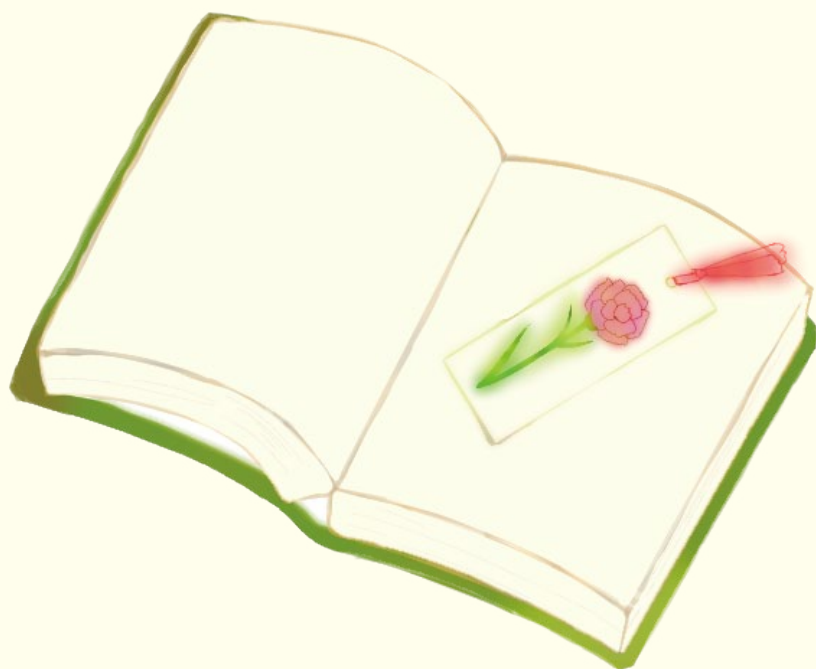


子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2022年5月 NO.225



[もくじ]

- 2～3 高知の文化ー継承と進化ー…濱田省司
- 4～5 半世紀に及ぶ写真家人生…野町和嘉
- 6～7 高知出身の舞踊家として…井関佐和子
- 8～9 本屋大賞の本、ために読んでみませんか…山中由貴
- 10 自分の好きな夢をやらしてもらってます…らびっとビーチ航
- 11 「アンテナ」カラクリシアター出演話…下尾 仁
- 12～13 高知市文化振興事業団3月の事業から
- 14～15 風俗歳時記・風伯

表紙デザイン：「思い出」 米沢楓子

公益財団法人高知市文化振興事業団

高知の文化 ―継承と進化―

濱田 省司

私が土佐高校を卒業し、進学のために高知を離れたのはまだ平成になる少し前、昭和五十六年三月のことでした。

約四十年ぶりに高知で暮らしてみても、昔との違いを痛感するのは県内にいろいろな文化施設が整備されていることです。私が高校生だった頃は、コンサートといえば県民文化ホールだけでしたし、美術館はなく、絵画や彫刻を鑑賞するといっても郷土文化会館に県展を見に行くくらいでした。それが今では、県立美術館や高知城歴史博物館をはじめとする県立文化施設だけでなく、市町村立の文化施設も充実しています。ざっと思いつくだけでも、美術館に歴史博物

館、自然科学館、高知出身の偉人をテーマとした施設、動物園に水族館と様々な種類の文化施設が県内のあちこちにあります。

しかも、コレクションのレベルも高く、県立美術館には、シャガールの油彩画のような世界的に有名な収蔵品もあります。来春からのNHK連続テレビ小説『らんまん』放映のニュースに沸く牧野植物園でも、牧野富太郎博士の幼少期から晩年にわたる生涯をたどる展示は、博士の「生きざま」が肌で感じられる大迫力です。

今の高知の子供たちは、文化や科学の施設に小さい頃から訪れることができます。そこで本物の芸術作品に触れて感性を豊かにし、

芸術や科学の知識も身につけることができる。そして、郷土出身の偉人たちの生きざまも追体験でき、自らの志を新たにする機会も得られるでしょう。私たちの年代からすれば、とても羨ましいことです。舞台芸術も県民文化ホールだけでなく、高知市のかるぽと、県立美術館のホールなど大きさまざまな立派なホールができ、いろいろな公演を楽しむことができるようになりました。

ホールは鑑賞するだけでなく、県内のアーティストの皆さんの発表の場にもなっています。私自身、「芸術」の域には程遠いのですが、五十歳を過ぎてそれまでの「仕事一筋」の生活から少し時間的なゆ

とりができて、思い立って東京や大阪で地域の男声合唱のサークルに参加し、何度かステージに上がった経験があります。「下手の横好き」でも、好きな音楽で思いっきり自己表現して、お客さんから拍手をいただく快感は、なかなか忘れたくないものです。

ここ二年ほどは新型コロナウイルス感染症対策のために文化施設を休館したり、自主的に文化活動を休止したりと、文化には厳しい状況が続いています。しかし、昔に比べれば県内の文化施設は整備が進み、文化活動のための環境面では恵まれているといえると思います。コロナに負けず、県民の皆さんには広く文化に触れ、親しんでいただきたいと願っています。

もう一つ、高知に帰ってきて生活して思い浮かぶ高知の良さといえば、やはり食の豊かさではないでしょうか。高知の変化に富んだ自然から生まれる海の幸・山の幸など、様々な食材やそのおいしさを活かした料理の数々。例え

ば同じ野菜でも木曜市で手に入れた春菊やトマトの甘さは都会ではとても味わえない絶品です。さらに名酒の産地としても知られる高知の食文化は、その食にまつわる「おきやく文化」も含めて、まさに全国に胸を張って自慢できる文化だといつていいでしょう。

こうした食文化を含めて、高知県には豊かな自然や長い歴史によって培われ、それぞれの地域で受け継がれた貴重な風景や文化が、他地域と比べても手つかずの状態に残っていると感じます。私の出身地である四万十市を流れる四万十川や、映画『竜とそばかすの姫』で昨年話題となった仁淀川などは、その美しい流域の景観等により全国から注目を浴びていますし、県内各地には古くから受け継がれてきた興味深い祭礼や行事が数多く見られます。しかし、県内の多くの中山間地域では、以前は行われるのが当たり前であった祭礼や行事が、過疎化や少子高齢化による後継者不足等で存続が危

ぶまれているケースが少なくありません。県民座談会「濱田が参りました」で県内各地にお邪魔すると、中山間地域での特産品づくりや地域活性化に中心となって取り組んでいただいている方々から、「先人から営々と引き継がれてきた地域の生活や文化を私たちの代で途切れさせてしまつては申し訳ない。精一杯地域を盛り上げ、次の若い世代に引き継ぎたい」という声をお聞きすることがあります。私自身、そうした声に励まされ、元気をいただきながら、「皆さんと一緒に高知をもっと元気にして、次世代に引き継いでいきたいと思います」とお誓い申し上げて、行脚に励んでいます。

受け継がれた高知の歴史を未来に伝えるため、今年度から、高知県史の編纂事業が始まり、今後二十年をかけて新たな県史を紡いでいくことになります。その過程においては、現時点で地域に残っている歴史資料の収集や聞き取り調査を行うことで、高知県の姿を

後世に残していく作業を行っていきます。昔から脈々と続く伝統や文化は、その地域に棲まう人間のアイデンティティともいえるでしょう。

高知のおもしろいところは、そういった古い文化が残っている傍らで、変化を続けながら発展し、今や海外からも注目される祭りとなった「よさこい祭り」や、平成四年度から始まり今年度で三十周年を迎えた「まんが甲子園」をはじめとした高知のまんが文化など、新しいものをどんどん取り入れ、発展させていけるところでしょう。自由を愛し、進取の気風に富んだ高知県人。そんな高知県人の一人として、先人から引き継いだ生活と文化を守り、そして進化させながら、次代を担う子供たちにバトンタッチできるように、微力を尽くしたいと思います。



はまだ せいじ
一九六三年 四万十市生まれ。
高知県知事。

半世紀に及ぶ写真家人生

野町 和嘉

二十代半ばにサハラ砂漠と出会い、その圧倒的なスケールと、厳しい風土を生き抜く人々の強靱さに魅せられたことを契機に、これまでドキュメンタリー写真を撮り続けてきた。

広告写真家のもとに弟子入りし、広告写真でフリーランスになった私であったが、友人とのヨーロッパ旅行の延長で、地平線を見てみたい程度の軽い気持ちで地中海を渡ってサハラと出会った。一九七十年代前半、半世紀昔の日本ではサハラの情報など皆無に近く、いわば地図上の空白地帯にも等しい土地だった。それだけに、果てしなく広がった砂の地平と、そこで出会った人々の営みは鮮烈で、私のテーマはこれだと閃いた。こうして広告写真からは徐々に距離を置き、サハラにのめり込んでいくことになる。

ひとつの井戸を頼りに、オアシスが恵んでくれるわずかな収穫を糧に、淡々と世代を重ねている人々。あるいは、砂と風に翻弄されながら家畜を追って寡黙に生きてきた遊牧民たち。この厳しい環境を生き抜いてきた人々の心の糧とは何だろうかと考えるようになり、そこに宗教の存在が限りなく大きいことに気づかされた。厳しい環境のもと、神の慈悲によって生かされていることへのひたすらな感謝と、神への畏れという感覚である。

宗教とは無縁な、古いものを次々に脱ぎ捨てて行つた先に豊かさがあるとした、高度経済成長の世相のなかで育つた若者にとって、環境によって人間がこうも違うのかという新鮮な驚きがあった。

一方で、砂漠は私を虜にした。当時サハラを自由に旅するには、

ヨーロッパで車を用意して持ちこむしかなかった。手間と時間のかかる旅だったが、砂漠に入ってしまったら、どこにキャンプを張るのも自由だった。どれほど暑い一日であっても、陽が傾くにつれ砂漠特有の放射冷却で気温はみるみる下がってゆく。やがて陽が落ち、刻一刻と濃くなってゆく夕闇のなか、澄み渡った空一面を満天の星々が覆いつくす。生き物の気配もない、乾ききった空間を何日も旅することで、他では思いもつかなかったような閃きと安らぎを持つことができた。そんな空間に自分が身を置いていることの不思議に思いをめぐらせているとき、もしかしたら、自分たちには関知できないもう一つの世界が、紙の表裏のような関係でこの現実に着しているのではないかという想いに囚われたこともあった。



サハラ：地平線を行くキャラバン

砂漠の渴きを実感したことで、サハラを流れる永遠に涸れない大河ナイルのことが閃き、その源流から河口までを辿る旅をした。その途上でエチオピア高原で受け継がれている独特のキリスト教と出会い、聖書時代さながらの祈りに魅せられ繰り返し通った。辺境の地で受け継がれている独特の文化に目覚めたことで、仏教の原型とも言えるチベットの祈りをテーマに、極限高地チベットの取材に、八十年代後半から取りかかった。さらに先住民文化と習合した南米アンデスの独特のキリスト教。ヒンズー教の源流とも言えるガンジス河の祈り、さらにカトリック

の総本山であるヴァチカンで西暦二〇〇〇年に催されたミレニアムの記念すべきミサをも撮影することができた。

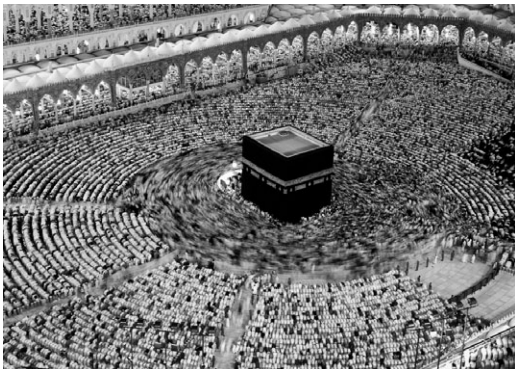
八十年代から九十年代半ばにかけて、日本でもグラフィ誌の全盛期であり、年間のうち半分近くを海外取材に費やしてきたが、それは、地球上の辺境地域と日本という、極端から極端に振れる、振幅の大きな振り子運動にも似たスリリングな日々の繰り返しだった。幸い好奇心を支えてくれる体力には自信があった。

約半世紀に及ぶ異文化との接触の中でもっとも印象深いのは、イスラームの聖地アラビアのメッカでの撮影である。世界の信徒数約十九億人、全地球人口の四人にひとりメッカを軸とした共同体に属している。そしてアッラーのシンボル、カアバ神殿のあるメッカと、預言者ムハンマドの廟墓があるメディナは、イスラームの二大聖地として、異教徒の立ち入りを頑なに拒んできた。

その異教徒禁断の地への招待状が、なぜかある日突然に、この私に届いたのである。一九九四年十月、差出人はメディナ在住の人物で、用件は、メディナの預言者モ

スクの写真集をつくりたいので撮影を依頼したいという要請であった。それまでイスラーム圏を広く歩き、メッカという強烈な磁場に魅せられながらも、断じて近づくことはできず、まして撮影など想像もできなかった聖地への招待状であった。迷ったあげく、私はイスラームを受け入れることにした。イスラームは遠い存在ではなかった。それまで二十年近く旅をして、なぜかあれらの土地の人々、そこに流れている時間が私の波長と響き合っていたのである。

半世紀に及ぶ写真家人生で、脳裏の深層に焼き付いているシーンといえば、一九九五年のラマダン



メッカ：ライラトル・カドルの礼拝

月に遭遇した、百万人が夜を徹して行うライラトル・カドルの礼拝であろう。地上九十六メートルのミナレットに立ち、カアバ神殿を囲んで同心円状に層をなした巡礼者が、導師の「アッラー・アクバル（アッラーは偉大なり）」の号令を合図に、一糸乱れずに平伏する動きを見下ろしながら、自分が立っているのは「神の視座」ではないのかと戦慄を感じたほどであった。

ミナレットへは、はじめ警備員が同行していたが、私ひとりを残して降りていった。夜空に朗々と響きわたる、神憑っているとしか思えぬ導師の声に呼応して、延々と繰り返される礼拝を、ただ独り見下ろしていた。そうして納得したことは、この形こそが、ヒトの誕生以来、人類が行き着いた、神への服従の到達点ではないかということだった。或いは異教徒にとつては、狂信的な畏れとしか映らない光景かも知れない。

私が好奇心全開で旅に明け暮れていた時期は、それぞれの土地に蓄積されてきた文化の原型が、最後の輝きを放っていた時代だったような気がする。それ以降も旅は続いているが、この十数年間で、

世界を猛スピードで覆いつくしてしまったグローバルゼーションのなかで、どの土地にあっても、憑き物が落ちてしまったような印象を受けるのである。世界は平らにフラットに、そして破格に便利で効率的になってしまった。それだけのために、風土に根ざした民族文化がどれほど変質してしまったことか、と思う。

追記・二〇二三年夏に高知県立美術館で大規模な回顧展が開催される予定です。

のまち かずよし

一九四六年高知県三原村生まれ。高知工業高校卒。一九七一年よりフリーの写真家。サハラ砂漠、ナイル川、チベット、サウディアラビア等での長期の取材を続ける。『サハラ』『ナイル』ほかの写真集を国際共同出版。東京、ローマ、ミラノほかで大規模回顧展『聖地巡礼』を開催。土門拳賞、芸術選奨文部大臣新人賞などを受賞。二〇〇九年紫綬褒章受章。日本写真家協会会長。

高知出身の舞踊家として

井関 佐和子

私が舞踊に出会ったのは、三歳の頃。

記憶にほとんど残っていない当時の写真が、私の四十年間の舞踊人生の証。

高知の地に生まれ、バレエが好きで好きで、踊るために存在していました。

故郷での思い出も、学校での思い出も、友達との思い出も、ほとんどかき消されてしまうくらいバレエ教室の記憶が鮮明に残っています。

大人になるにつれ、学校や友人を懐かしみ、高知の地で生まれたことを誇りに思うことはありますが、当時それらは何も重要ではなかったのです。

子供の頃から、高知という地に執着していなかったせいもあるのか、大阪でも東京でもなく、海外に行くことだけを目指していました。

海外旅行に十五歳のときに初めて行って以来、衝撃と興奮の日々

を過ごし、十六歳であつという間に海外留学を決めました。最初は両親も反対したはずだけれど、そのことすら全く記憶にないです。

覚えているのは、留学する日、関西国際空港で「今生の別れ」と言わんばかりに母と別れ、一人飛行機の中で母からの手紙を読み、泣き崩れ、震えていた記憶。

そこから三年間は、見たことの無い世界を肌で感じ、大いに笑い、大いに泣き、青春を謳歌して、今ではすっかり恥ずかしい学生時代の記憶として残っています。

そして十九歳でプロのダンサーとして、オランダのコンテンボラリーダンスカンパニーと契約をすることになりました。

それは、お給料をもらって自立をしたということ。契約をもらうにあたり、「踊ってみたい!」と思つたカンパニーの門をたたき、「公開オーディションに来てください!」と言われても、「丁度その時は無理なので、個人的なオーディション

をして欲しい」と懇願し(今だから言えることだが、公開オーディションの日は何も予定はなく、ただその他大勢の中で見られるより、一人の方が確率が上がる!というしたたかな策略)、三百倍の倍率の枠を勝ち取りました。

オーディション直後に公衆電話から、母へ国際電話をかけて、「ほぼ確定した! 大丈夫だと思ふ!!」と小さな声で喜びを伝えたことを覚えています。

私は、小さな頃からバレエ一筋で、両親の支えもあり、バイトもしたことがなかったため、初めてお給料をもらえることに本当に感激しました。

日本で舞踊家として、それだけで生計を立てている人はあまりにも少ない。そのことを若い頃から知っていたからこそ、胸を張って舞踊家として生きていけることを誇りに思いました。それはその頃の私にとっては大きな夢が叶った瞬間だったのです。

一度プロの舞踊家としてスタートしてしまえば、そこからはどんな職業でも同じこと。挫折し、追い詰められ、そこから這い上がり、キャリアアップをしたくなり、移籍をして、また新たなスタートを始める。

そうしてたどり着いた場所が、

新潟。

私の人生でこの地に来ることなど誰が予想したでしょう。高知で生まれ育った私にとっては、ほぼ未知の場所。学校で習った「信濃川」くらいしか知識がなかったのに、どうしてこの地に降り立ったのか。

二〇〇四年四月に、新潟市民芸術文化会館りゅうとぴあに劇場専属舞踊団「No is m」が設立されたからです。

簡単にいうと、日本では今までなかった公的に支えられた舞踊団ができたということで、舞踊家は新潟市の財団と年間契約をし、毎月分割で契約料をもらって生活をしています。(残念ながら、公務員や会社員のように保障はありません。しかし市民の税金を使わせてもらっていることは事実です)。

毎月決まった額が支払われ、朝から晩まで、舞踊にだけ向き合える環境をここ新潟でやっと手に入れることができたのです。

ヨーロッパでプロの舞踊家として踊っていた私にとっては当たり前ですが、日本では新たな歴史を作るようなことで、日本の舞踊界は大きく揺れました。

その発端に金森稜という稀有な芸術家があります。

彼の話を少しすると、彼自身も



写真撮影：篠山紀信

十年ヨーロッパの第一線で踊り、振付家としてもキャリアをスタートさせていた時期に、新潟市からりゅうとびあの舞踊部門の芸術監督になってもええなかと、オフアーを受けました。日本ではよくある「芸術監督制度」。それはある種のアドヴァイザー的な立ち位置で、年間通してその劇場でどのような公演をするか等を決めていく役割。彼がそのオフアーを受けたときは二十九歳。想像するに、普通なら喜んで引き受ける話だと思います。若くして、地位を獲得して前途洋々なはず。

しかし、この人は変わっていたのです。

新潟市に「専属の舞踊団を作るなら芸術監督になる。しかしでき

ないのであれば辞退する」と。新潟市側も驚いたでしょうね。若い男が啖呵を切って言い出したことに。

彼の考えでは、それまで使われていた予算額を変えるつもりはない。今まで外部から（特に都市部から）新潟で公演してもらうために使っていた予算をそのまま舞踊家たちの給料にしたい。新潟から世界に発信する舞踊集団を作りたいう！と。予算が変わらないというのなら、新潟市側も可能性が見えたのではないのでしょうか。

提案から一カ月ほど経ったある日。彼のもとに電話があり「やりましょう！」という新潟市の言葉で、本当に歴史が変わったのです！今まで「点」だった日本の舞踊界に初めて「線」が書き始められたのです。

私は、この線の一番最初の瞬間にいたかったです。だから新潟へ行き、早十八年が過ぎました。

私はここで、舞踊家のあるべき姿を学び、毎日八時間稽古に明け暮れ、舞台に立ち続けました。

私の持論ですが、舞踊家が成熟し、芸術家になっていくために最低でも十年はかかると思います。それを日本の文化として公的に支えることができない国は本当の意味で貧しい国だと考えます。流行

り物やアイデア勝負なもの、あくまでも点でしかない。その底辺にある質だったり、強度がぶれない限り、それは根付いていき、未来へ受け継がれていく線になるのだと思うのです。

今年の初めに私はこの舞踊集団と共に高知で踊ることができました。それは一個人の凱旋公演というものを遥かに超えて、高知の方々に日本で唯一の舞踊団を観ていただける大きなチャンスとなりました。

難しい、堅苦しいと思われるがちなコンテンポラリーダンスの公演が完売になったのです。そして方々から称賛をいただき、高知の若い舞踊家たちからも感動したとの言葉をうけ、「新潟市は素晴らしい！」と言われました。これこそ私が受け継いでいきたいものなのだと確信をしました。若い舞踊家たちが受けた感動を自ら実践できる環境があり、次の世代にまた感動を引き継いでいき、それが長い歴史の中で語り続けられるものになっていくのです。

残念ながら日本では、新潟で生まれたこの歴史はまだ受け継がれていません。

私はこの国の各地で専属の芸術集団が多数あり、賑わい、交わり、成長していく姿を見ることが夢で

あり、そしてその各地の一つに高知があることを心から願っています。

いせき さわこ

一九七八年高知市生まれ。舞踊家。Noisism副芸術監督。三歳よりクラシックバレエを一の宮咲子に師事。十六歳で渡欧。スイス・チューリッヒ国立バレエ学校を経て、ルードラ・ベジャール・ローザンヌにてモーリス・ベジャールに師事。九八年ネザール・ダンス・シアターⅡ（オランダ）に入団、イリ・キリアン、オハッド・ナハリン、ポール・ライトフット等の作品を踊る。〇一年クルベルク・バレエ（スウェーデン）に移籍、マッツ・エック、ヨハン・インガー等の作品を踊る。〇四年四月Noisism結成メンバーとなり、金森穰作品においては常に主要なパートを務め、現在日本を代表する舞踊家のひとりとして、各方面から高い評価と注目を集めている。〇八年よりバレエミストレス、一〇年よりNoisism副芸術監督も務める。第三十八回ニムラ舞踊賞、令和二年度（第七十一回）芸術選奨文部科学大臣賞受賞。

本屋大賞の本、ためしに読んでみませんか

山中 由貴

毎年四月に発表される、本屋大賞をあなたは知っているだろうか？

「全国書店員が選んだいちばん売りたい本」と掲げられている文言どおり、ふだん本を買う人とい

ちばん密接に関わる書店員が、実際に読んでよかった、お客さんに届きたい本（小説にかぎる！）を選ぼう、売場からベストセラーを生もう、ということと立ち上げられた、本屋発の文学賞、それが本屋大賞だ。

新刊書籍をとりあつかう本屋の（つまり古書店はNG）現役書店員なら、社員やアルバイト問わず投票に参加できるという気安さで、二〇〇三年からはじまった本屋大賞は、今年十九回目をむかえる。数えてみると、わたしは投票に参加して七回目、そこそこの常連投票者だ（えっへん）。

気安く投票、と書いたけれど、一次投票はさておき、二次投票ま

でこなすとなるとこれがなかなか大変で、その苦勞を知っていたために、すこし紙幅を割こうと思う。

まず、年始に一次投票の締め切りがある。一次投票は、一年間に発売された小説のうち、もともと面白かった、これをじぶんの手で売りたい、脚光を浴びてほしい、どんな理由でもかまわないが、書店員が各自、一位、二位、三位の順位をつけて感想コメントとともに投票することができ。これは純粋に楽しい。

全国から集まった一次投票の集計をして、得票数の多かった十作品が本屋大賞ノミネット作として発表されるのが一月なかば。そこから二月末の投票締め切りまでのあいだに、ノミネット作十作品をすべて読んで、その中からあらためて三作品を順位づけして投票する、それが二次投票だ。

二次投票は苦しい。すべて未読だったら、一カ月半のあいだに十冊本を読まないといけない。これが時間的に苦しい。参加する書店員はこのあたりでだいたいひとしきり文句をいう（わたしだけかも）。今年は全作読んでいたと自慢する。あるいはやけになって未読数を誇らしげに自慢する。とにかく読んでわんやで読みまくる。励ましあって読みまくる。読みきれなくて二次投票は断念する人もいる。まあ、その苦勞が、なんだかんだ楽しい。毎年、誠心誠意読んで、この本こそ本屋大賞にしたい！と祈る。

さてここで今年の本屋大賞ノミネット作を紹介しておこう。

『赤と青とエスキース』

青山美智子（PHP研究所）

『硝子の塔の殺人』

知念実希人（実業之日本社）

『黒牢城』

米澤穂信（KADOKAWA）
『残月記』 小田雅久仁（双葉社）
『スモールワールズ』

一穂ミチ（講談社）
『正欲』 朝井リョウ（新潮社）

『同志少女よ、敵を撃て』
逢坂冬馬（早川書房）

『星を掬う』
町田そのこ（中央公論新社）

『夜が明ける』西加奈子（新潮社）
『六人の嘘つきな大学生』

浅倉秋成（KADOKAWA）
（敬称略）

今年もなんとか二次投票を終え、あとは結果が発表されるのを待つばかりの身でいまこれを書いていく。そのうちの一冊について語りたい。



それは、逢坂冬馬さんの『同志少女よ、敵を撃て』だ。

第二次世界大戦中もとても苛烈といわれたドイツ対ソ連の戦争、いわゆる独ソ戦で実際にいた、ソ連の女性狙撃手たちを題材に、女性同士との友情や戦場での凄惨な命のやりとりを描いた物語である。

故郷の人びとや家族をドイツ兵に殺され、ソ連軍の狙撃手として生きることを選んだ主人公セラフィマは、訓練学校で同年代の少女たちと出会い、厳しい訓練を経て戦地に赴く。激しい戦闘で仲間を喪いながら、人を殺すことでしか生き延びることができない場所、彼女がどう変貌していくか、それを丁寧になぞっていく。

戦闘シーンの臨場感やセラフィマたちの活躍に、わたしは圧倒された。銃弾飛びかう戦場にじぶんが立っている、そんな気ずらした。セラフィマに乗り移り、危険な作戦を成功させたときには喜びがあった。ストーリーテリングは抜群で、そのなかでしだいに心がからっぽになっていくセラフィマの、人間性のあやうさが胸に突き刺さる。

アガサ・クリステイ賞を受賞してデビュー作となり、異例の重版を重ねて直木賞候補にもなったこの小説は、やはり凄い。こんな骨

太で、日本人には身近ではない独ソ戦をあらためて知るきっかけを与えてくれたこの作品が大好きで、わたしは本屋大賞に、その思いを感想として綴り、一位投票した。そしてそれから数日して、ロシアとウクライナの戦争がはじまった。

戦争を描いた物語が、物語（フィクション）でいられる世界ではなくなってしまった、その衝撃はこたばにできない。物語で描かれたのは過去のできごとだと思っていたのに、同じ国がまた同じことを繰り返しているなんて。

戦争ものの作品を愉しむ、もちろんそれは「愉しむ」というより、じぶんから進んで感情を動かされるにいく、ということだけれど、そ

れがとんでもなくおおきな間違いのように感じて、胸が苦しくて苦しくて、こうして書いているあいだも考え込んでしまう。

じぶんが本屋大賞に投票したときの感想コメントが、頭にへばりついて離れない。

「戦場に立って爆発音を聞き、血を見ること。少女たちの笑顔が脳裏に焼きついて離れないこと。ほんとうにもうのすごい経験をさせてもらいました」とわたしは書いたのだ。

じつさいにいま、戦場で爆発音を聞き、血を見ている人に、もちろんこんなことは言えない。物語が物語にすぎないとわかっているから、危害のおよばない場所、じぶんは無関係だと思っているから言える、浅はかなことばだ。

物語がわたしに残してくれたものとはなんだったのか、それからずっと考えつづけている。作者がセラフィマを通して読者に刻みつけたかったものとは。

もしもこの本を読んていなければ、現実にはじまってしまった戦争にこんなにも心をえぐられることはなかった。わたしはもう、ひとりの人間としてセラフィマを知ってしまった。セラフィマとして物語のなかで生きたのだから。まさに、それこそが物語の力じ

やないだろうか。

すぐれた物語は読者をその世界に引きずり込む。そこでの体験は架空だから意味がないなんてことはなく、揺れ動いた感情は読んだ者のなかに、たしかに残る。

日々報道される戦争被害を知って、フィクションのなかで感じた興奮やつらさがうわべだけのものだと恥じる気持ちも、物語を読んだからこそ生まれた、わたしの痛みだ。

それは、わたしにとっては意味のあることだった。それを自覚したうえで現実を注視しなければ、と思うことができたから。

あなたがどうこの物語を読むか、わたしにはわからない。

それでもやはり、この本をあなたに手渡したいと思う。

本屋大賞には、なにが選ばれたのか、ぜひ本屋さんについてその目で確かめてほしい。

やまなか ゆき

一九八〇年 高知市生まれ。

TSUTAYA A中万々店の書店員なかしんぶん編集長としてTwitter やってます

好きな本について喋るときだけ饒舌になります。



自分の好きな夢を

やらしてもらっています

らびっとビーチ 航

芸人になりたいという気持ちが芽生えたのは、中学生の頃に文化祭でクラスの友人と漫才をして、笑ってくれる人の笑い声が聞こえるその光景に感動したのがキッカケです。しかし一番の決定打は、そのお笑いに自分の学校生活、部活動などが精神的に支えられたからです。

そこから少しでも笑いで皆を明るくしたい、たくさん笑って幸せになって欲しいという気持ちに変わり、芸人を志しました。芸人になるためにまず、ワタナベコメディスクールという養成所に入學し、そこで今の相手方である女性のゆきとアメリカ人のダニエルとトリオを組み、らびっとビーチを結成しました。この国籍も性別もバラバラで個性のある三人なら、イ

ンパクトもあるし、面白いものも作れるし、絶対に自分たちにしかできないお笑いができるぞと思っていますでしたが、現実はその甘くありませんでした。インパクトだけはあるが、一番大事なネタが全然ダメで、三人の個性・国籍・性別がバラバラな故にネタもバラバラで一つの漫才にすることができず、本当に苦労しました。今でも苦労しています(笑)。

養成所に通うこと一年、ワタナベエンターテインメントに所属できることになり、そこから本格的に芸人としての歩みを進めていくわけですが、なかなかすぐには上手くいくわけもなく、ネタの方でも結果が出るわけもなく、賞レースでも結果がついてくるわけでもなく……という時が長く続きました。

昨年末にありました「笑神様は真夜中に」というロケをメインにした番組で、若手ロケバトルという企画番組に出演できたことだけでもありがたいのですが、そこで優勝して新春の「笑神様は突然に」新春二時間SP」に出演が決まるなど年末年始とテレビに出たことを三人で嬉びました。

もちろんネタを面白くというのはありますが、それとは違うロケというジャンルでこのような結果が出たのは本当に自信になりました。何よりSNSなどで、面白か



らびっとビーチ

ったとメッセージをいただいたときには涙が出るほど嬉しかったです。昔、芸人を志した時の皆さんに明るく幸せになってほしいという想いが実現できたと思うと本当に嬉しく、お笑いをやって本当に良かったと思いました。

この気持ちを忘れずにこれから、もっともっと皆さんにらびっとビーチを見ていただき、笑っていただいて全国の皆さんに知っていただけるように、ネタはもちろん、さまざまなことにチャレンジして売りたいと思っています。

いや日本だけではなく世界にも世界中の皆さんが笑って元気に幸せになれるように、らびっとビーチ三人これからも頑張っていきたいと思っています。

わたる

一九九三年五月三十日 高知市生まれ。

「アンテナ」 カラクリシアター出演話

下尾 仁



周波数を合わせれば、いろんな人と出会い繋がる事ができる。アンテナを高くとって沢山の人と繋がろう。

三年前、高知の劇団カラクリシアターさんから出演依頼がきた。カラクリシアターは僕が演劇を始めるきっかけとなった故・帆足寿夫氏の劇団「演劇センター'90」のメンバーたちが中心に立ち上げた劇団で、ほとんどが知り合いである。リーダーの谷山さんは出演するメンバーを当て書きし、オリジナルの台本を書き上げ作品を発表している。当て書きするので僕をイメージした役があるらしい。僕も好きな劇団であり、好きなメンバーたち、いつかは一緒にできればと思っていたので、よろしくお願ひしますと出演を承諾した。

作品名は『秘密のマウス』。場所は地球三十三番地近くの劇場「蛸蔵」。週三回の練習では、まず

台本の読み合わせ、何回か読み合わせをしていた時、文化高知No.216でも書かせてもらったが、まさかの顔面神経麻痺になり、顔半分がまったく動かなくなってしまった。

こんな状態では出演は無理と思い、申し訳ない気持ちと残念な気持ちがありつつも出演を取り下げてもらった。すると世の中はコロナという病が広まり、いろいろなイベントが中止に。カラクリシアターの芝居も延期になってしまった。谷山さんは延期の間、構想を膨らませ、新しく台本を書き上げ、美術館ホールも押さえて、再度出演依頼をしてくれた。顔の状態もよくなってきたいたので二つ返事で出演する事に、作品名は『さすらいのキャリアー』。

ノストラダムスの大予言を信じた父が突然会社をたたんで、家族三人軽トラで長崎から北海道まで旅に出る。旅の途中いろいろな

と出会い、トラブルに巻き込まれていき地球滅亡の日をむかえるという内容。僕の役どころは、元暴走族で借金まみれ、どうにもならず東尋坊へ。そこで軽トラファミリーと出会い、旅を共にするという役。しかも軽トラを美術館ホールにあげるという、なんとも大掛りな構想。最初、美術館のスタッフに軽トラをステージに上げてもいいかと相談した時、スタッフ側から無理ですとはっきり言われたらしい。しかし谷山さんは、諦めずエンジンやガソリンタンクなど可燃性のおそれのある物は全部外



すということ、なんとかオツケーをもらい、構想は一步前へ進んだ。

二〇二一年十二月から練習を始めたのだが、またしてもコロナの第六波が日本中に蔓延、練習もできない状態が続いた。しかし『さすらいのキャリアー』でもテーマの一つになっている諦めない心を持ち、メンバー、スタッフ共に本番にむかっている。この原稿を書いている今はまだ本番をむかえていないが、この文化高知を手に取り、軽トラは、無事に舞台上に上がる事はできたのだろうか、トラブルはおきなかったのか、僕の頭の中では、舞台はおおいに盛り上がりみんなの笑顔がみえている。そんな未来に、

「行こうキャリアー」
なおキャリアーとは、スズキの軽トラ名です。

しもお ひとし
一九六九年生まれ。
岡豊高校一期生。二十五歳ぐらいに演劇に目覚め、日夜面白い事はないかとキョロキョロしている。

3月の事業から

三遊亭円楽・風間杜夫・桃月庵白酒 (休館前の) 特別落語会!!

二〇二二年一月末、三遊亭円楽師匠が脳梗塞で倒れたというニュースが流れ、三月六日に本落語会を実施できるかどうか難しい判断を迫られました。風間杜夫さんや、桃月庵白酒師匠も出演予定でしたので、何とか開催できる方向を探っていました。間もなく、制作会社を通じて、林家木久扇師匠が代役を引き受けることが可能だという連絡をいただきました。円楽師匠の回復をぎりぎりまで待っていました。二月中旬、代役での落語会開催を決断しました。

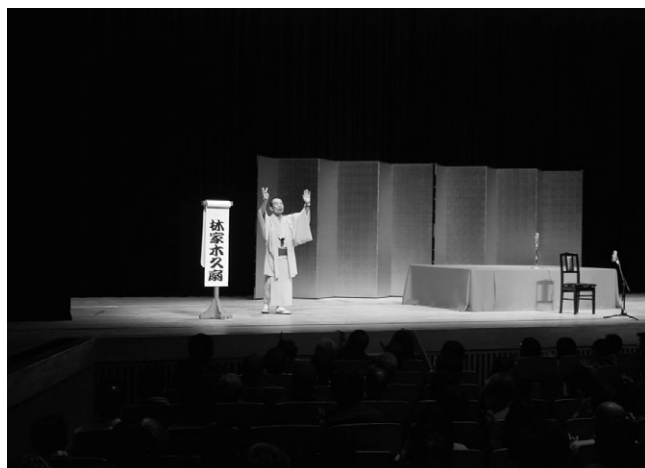
本落語会、前座として、桃月庵あられさんが高座に上がり「金明竹」を披露。そのあと桃月庵白酒師匠に繋ぐ予定でしたが、せっかく高知に來たのだからと、木久扇師匠のお弟子さんである林家木りんさんも高座に上がるようになりました。急遽、あられさんのあとに登場した木りんさんですが、元大関、清國勝雄さんの息子という相撲ネタでがつつりお客さんの心を掴み、「力士の春」を演じました。

白酒師匠は、年間六百ほどの高座をこなしているその実力をいかななく発揮され、「転宅」という演目で多くの笑いを誘っていました。

仲入り後、風間さんが登壇。難しく覚えるのも大変だという古典落語「宿屋の富」に挑み、俳優として培ってきた演技力が光る名演でした。

大トリで高座に上がったのが、林家木久扇師匠。人気番組『笑点』での裏話や、噺家への小言を面白おかしく話してくれました。笑点メンバーの仲の良さが窺える内容で、多くのお客様から、笑い声が漏れていました。「明るい選挙」という演目では、立川談志師匠との思い出を懐かしみながらも、ユーモアたっぷりに話してくれました。

噺家の声で観客の脳裏に映像を見せるのが落語だと言います。皆さん、まぐら（落語を聞いてもらいやすくするために、本編の前に、自己紹介や時事・時節ネタに触れ、会場の雰囲気をはぐずるもの）が



大変面白かったため、落語を初めて聞いた方でも、頭にその情景が浮かんできたことだと思います。かるぽーと休館前にお贈りした高知だけの特別な落語会。会場にお越しいただいたお客様のコロナ禍での鬱陶しい気持ちだが、少しでも晴れたなら幸いです。

〈入場者数 三百八十六名〉

高知市文化振興事業団

スタインウェイピアノの贅沢レッスン

かるぽーとは、スタインウェイ&サ
ンズ社のグランドピアノ（Dー274）が一
台あります。Dー274は、コンサートホー
ルに合わせた最上級モデルで、本体価格
は二十万円を超えるともいわれています。
そのグランドピアノを大ホールで独り占
めできるという贅沢な催しを、かるぽー
とで開催しました。題して、「スタイン
ウェイピアノの贅沢レッスン」。かるぽー
と休館前の4週連続企画の第3弾として、
三月十八日・十九日に計画しました。当
初、この二日間で実施する予定でしたが、
大変多くのお申し込みをいただいたため、
急遽、日程を一日追加し、全三日間で開
催しました。それでもお断りしてしまっ
た方、申し訳ございません。

開催した三日間で、十八組八十一名の
方にご参加いただきました。一人ですつ
とレッスンする方、教室の発表会を開催
した方、パートナーと連弾を披露した方、
親子でピアノを弾き合って思いい出を作っ
た方、入院している我が子にテレビ電話

で音楽を届けた方、卒業記念にドレス着
用で演奏した方等々、様々な思いで一
時間自由にご使用いただきました。この一
時間、スタート時と終了時を除いて、ホー
ルスタッフも参加者の視線に入らないよ
う意識し、完全なプライベート空間を作
りました。最初は、大きなホールの空間



にピアノ一台と自分だけという状況にと
まどいを見せる方もいらっしゃいました
が、弾き始めると、あつという間の一時
間だったようです。たった一時間ではあ
りましたが、未就学児から七十代の方ま
で、スタインウェイはその人の記憶に刻
まれたことでしょう。

帰り際、皆さんに感謝の言葉をいただ
き、次回の開催も切望されました。かる
ぽーと再オープンの際には、第二回の開
催も検討したいと考えています。詳細は、
ホームページやツイッターでお知らせし
ますので、見逃さないようチェックして
いてください。

二〇二二年四月から一年間、スタイン
ウェイは、その音色を響かせることはあ
りませんが、再オープンの際には、皆さ
んもその高貴な音色を確かめに、かる
ぽーとにお越しくださいますと幸いです。
〈参加者数 十八組八十一名〉



高知を撮る

第37回写真コンテスト入賞作品

硝煙降る

(令和2年5月17日 高知市浦戸 龍馬記念館)

岡村 雄策

発射音と共に降る硝煙と火粉を撮りました。※長宗我部鉄砲隊の練習から

牧野富太郎が新種のササを発見し「スエコザサ」と命名したことは有名だ。妻、寿衛子の名をとったものだという。一種の美談として聞いていた。

ところが、牧野の伝記『MAKINO』（竹内一著 北隆館）の中で意外なことを知った。「植物を命名するに当たって、牧野はそこに私情をはさむことを嫌悪した」とある。こんな逸話が紹介される。

日本のアジサイに初めて学名をつけたのはシーボルトである。学名の中に「オタクサ」という単語があった。「オタクサ」とは何か？日本の植物学者達にはわからなかった。牧野はその言葉にこだわった。そして調べあげる。シーボルトは長崎で暮らしていた。「オタクサ」は長崎方面のアジサイの地方名かもしれない。そんな仮説も立てた。

ところが予想はずれ、「オタクサ」はシーボルトの愛妾「お滝さん」からきていることが判明する。牧野は憤慨し、学会誌でシーボルトを激しく批判した。この清浄な花が、その名前によって汚れている（植物の命名というのは、植物分類学において最も重要な行為である。シーボルトのアジサイのように、その植物

スエコザサの謎



風俗歳時記

されていらない。この「余白」がいい。謎が謎として残される。

二〇一三年度前期のNHK連続テレビ小説は、牧野富太郎をモデルにした「らんまん」である。「スエコザサ命名」のくだりを主演の神木隆之介がどう演じるか。今から楽しみである。

(本の虫)

牧野はどういう思いで「スエコザサ」の命名に踏み切ったのか。やむにやまれぬ何かがあったのだろうという推測は『MAKINO』中でもいくつか示唆される。けれど断定は

と無関係な愛人の名を学名とするような私情をはさんではならない。これが、当時の牧野の信念だった。妻の名にちなんだ「スエコザサ」という命名行為は明らかにその信念と矛盾している。

この矛盾はどう読み解くことができるだろう。

牧野が新種のササを発見したのは昭和二年である。この年、寿衛子は重い病で入院する。そして翌年二月に亡くなっている。貧苦の中で、経済観念のない牧野の研究生活を支え続けた妻、たつた。

と無関係な愛人の名を学名とするような私情をはさんではならない。これが、当時の牧野の信念だった。妻の名にちなんだ「スエコザサ」という命名行為は明らかにその信念と矛盾している。

この矛盾はどう読み解くことができるだろう。

牧野が新種のササを発見したのは昭和二年である。この年、寿衛子は重い病で入院する。そして翌年二月に亡くなっている。貧苦の中で、経済観念のない牧野の研究生活を支え続けた妻、たつた。

©2021 STORYTELLER DISTRIBUTION CO.,LLC.

第197回
市民映画会

6月15日*
6月16日*
高知県立美術館ホール

上映時間
ターク・ウォーターズ
①10:20 ②14:55 ③19:15
アトム・ユア・マン
①12:55 ②17:15

【入場料】一枚のチケットで両方の作品をご鑑賞いただけます。
一般：前売券1,300円、当日券1,500円、割引：1,000円（前売・当日とも）
※学生証、長考手帳、障害者手帳等をお持ちの方は割引
【お問い合わせ】高知市文化振興事業団 088-883-5071

©2021 LETTERBOX FILMPRODUKTION, SÜDWESTRUNDFUNK

風伯

百花繚乱城

初」が想起される。藩政期、「グランド通」電停辺りの乗出から堀詰まで、太鼓やほら貝の響くなか、千の騎馬が駆け抜けた。土佐藩最重要年中行事であり、万が一、やぐらで閲兵するお殿様の前で落馬でもしようものなら、未代までの大失態であった。

私も試練から逃げてはならぬ。若い

正月小寒、「とでん」に乗る。向かったのは、「ネイキッド・フラワーズ・高知城」。乗車時、久しぶりにICカード「ですか」を読み取り機にタッチ。二百円すら入ってなかった。デジタル庁ならぬ「アナログ町」原住民の私には、現金のチャージが試練である。

電車で土佐の正月といえは、「御

女性運転士のもとに向かう。丁寧な指南のもと無事チャージでき、安堵する。お城では提灯を持たされ、二の丸まで八〇キロが登城。アナログ町民の私は何のイベントかよくわかっていなかったのだが、お城や壁、道などに百花のデジタル画像が映写され、きれい。三の丸に回ると、再び試練が襲う。QRコードからスマホを操作し、入力した名前とともに、綿毛がお城に華々しく投影される「ダンデライオン」。

大失敗。泣きそうになる。若い女性スタッフから懇切な指南を受け、やり直し。スマホを読み取り機にかさす。ついに本欄筆名のローマ字が、太鼓のような響きとともに、お城に投影された。正月の大役を果たしたのだ。女性スタッフも喜んでくれた。

帰りの電車、カードを読み取り機にタッチ。その瞬間、心の中にタンポポの綿毛が舞った。

(昌)

アメリカのオーディション番組『アメリカズ・ゴット・タレント』で優勝し、賞金100万ドルを獲得！
全米No.1ダンサーとして、世界中を虜にしたパフォーマー
姥名健一が高知に！
一躍人気者となった EBIKEN のダンスパフォーマンス。

【特別出演】

★鉄棒を用いて空中で踊る
エアダンスの先駆者（上西隆史）
★世界中で活躍中の一輪車演舞
（ユニサークル・フロー）

【日時】

7月13日（水）
開場 18:30 開演 19:00

【会場】

高知県立県民文化ホール
グリーンホール

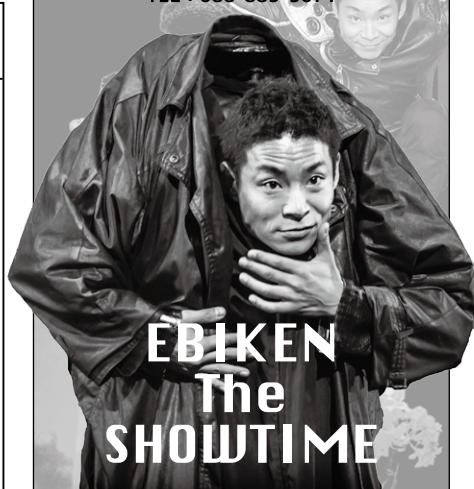
【入場料】

全席自由
一般 4,000円
高校生以下 2,000円
（当日券+500円）

※未就学児の入場はご遠慮ください

【主催】

公益財団法人高知市文化振興事業団
TEL: 088-883-5071



今号の表紙

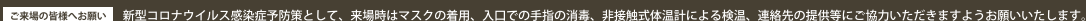
「思い出」

米沢 楓子

母の日に、子供が渡したカーネーションを、母親が大事に押し花にし、葉にしておいているというシチュエーションを想像して描きました。

カーネーションと葉のリボンは赤色なので、映えるように本の背景色は緑にして、思い出や古い感じをだしたかったので、全体的に黄色くして、懐かしさを感じるようにしました。

（よねざわ ふうこ／
国際デザイン・ビューティカレッジ2年生）



デザイン：佐竹蘭花